

市芦救援会通信

市芦救援会通信 〒659 芦屋市剣谷9 市芦分会気付 0797(32)1131
88/11 通巻23号 (1部100円) 市芦救援会 発行人 玉本 格

1988.11.9~11 第14回審理 12月26日(月)AM10~11 前田証人に対する反対尋問
＜12月13日が26日に変更＞

十三回公開口頭審理報告

前田証人、カラ出張で公金横領 不正・腐敗を増長する市教委

市芦救援会事務局

前回にひきつづき前田証人への反対尋問が行なわれ、公文書偽造について、なんと不正公金着手の事実が明らかにされました。

六年前に新潟で行なわれた全国校長会に出張したとみせかけ、復命書までデッチ上げる公文書偽造を行い、精算まで済ませて旅費等をだましとっていたのです。しかし、参加領収書が必要となり、ハレンチにも市芦の公印をさかさまに押して偽造したのが発覚し、そこであわてて市会計に戻したことが明らかにされました。

苦しまぎれの言いのがれをしていた前田証人も、申立人側から次々と証拠書類が提出されるにおよんで、「現地で急病になりすぐ帰ったので、その旅費は市に返すべきもので返した」と、行政処理上もまったくのデタラメな証言もする有様で、審査長からも追求されました。

「後日に年休措置した」「金は返した」と居直る中で、市教委全体の不正、腐敗ぶりが明らかとなりました。組合員の出張は不承認として処分し・年休届けについても組合員のは認めず賃金カット処分をするなど、一方での組合弾圧の不当労働行為とは極めて対照的な話として、市教委の不正ぶりが明白となりました。校長権限の強化の中で、一層腐敗がすすみ、まさに市教委全体が不正・腐敗の温床となっているので

も／く／じ

第13回公開口頭審理報告	
前田証人のカラ出張で公金横領 不正・腐敗を増長する市教委	市芦救援会事務局 1
年末カンパのお願い	市芦救援会事務局 6
特集・市芦文化祭 近づく文化祭	市芦障害研顧問団 7
市芦の片隅で	鈴木 紀之 8
シナリオ 明夫とみさ子	市芦障害者解放研究会 9
国労北九州支部よりオルグ来阪	救援会会員T 12
活動日誌＜抜粋＞	12

ひきつづき鈴木先生の強制配転に関する追及の中で、二年前に「市行革大綱」の説明が市教委からあった時の状況について、証人が現場の長として、市芦の教育条件の確保についても一切具体的な説明をせず、むしろ市教委の手先としてしか動いてこなかったことが明らかとなってきました。市教委の「行革」に名をかりた組合つぶしに手をかけたということの具体的追求が、次回以降きびしくつづけられることになりませう。

急病で帰った新潟出張？

以下、反対尋問の一部を抄録しておきます。

在間 証人の経歴書によると、昭和三十九年一月から市芦に勤務をされて四十九年四月に教頭になられて、五十六年の四月に校長という経歴ですね。その間、御自身も出張については厳格にされていたということではないですか。

前田 極力しておりました。

在間 その点に関して甲一七号証から一九号証。これまでのお話と関連しますので、お聞きしますが、五十七年十月一日から一六日まで三日間の学校日誌のコピーです。これを見ましたら、出張者の欄にいずれも学校長、都市立校長会（新潟）と書いてあります。証人が三日間新潟に出張されたと書いてある。ご記憶ありますか。

前田 この時でなかったかと思いますが、乗りまして新潟に着いた直後に、元々胃腸が弱いもんですから、急病といえますか猛烈な下痢におそわれまして、そのまま帰って来て年休に替えたんじゃないかと思えます。

在間 甲二二号証。これは何という書類なんですか。

前田 これは事務室において作成するものではないかと思えます。昭和五十七年九月一四日に起案されたという事柄です。

前田 はい。

在間 決裁欄の印かんを見ますと、この書類は市教委まで上がっているということですね。

前田 はい。

在間 校長会の開催の要項が書いてありますね。これを見ますと出張者は証人である。経費は五万四千九百円。支出の科目が下に書いてある。これは出張前にこの書類を市教委の方へお出しになって、出張費等については事前に受け取っていかれるわけですか。

前田 はい。

在間 甲二二号証。これは出張後の書類ということですね。全国都市立高等学校校長会第二

出張する前に復命書を書いた

前田 はい。

在間 甲二二号証。これは出張後の書類ということですね。全国都市立高等学校校長会第二

三回秋季総会・研究協議会全国理事会参加について（復命）。これ全部証人がお書きになりましたか。

前田 はい。

在間 内容を見てもらえますか。甲二二号証の二枚目、五に意見・感想という欄があります。これも証人がお書きになりましたか。

前田 はい。

在間 この内容ですが「毎年のことながら、全国校長会では、大海を知るといって点で意義を感じる。また、各校の経営報告では、規模の大きい学校で同窓会等のバックアップの大きさなど羨望される場所が多かった。全国的な設定の中で、本校の将来も考慮しながら本校の教育を確立していきたいと痛感した次第である」。ご記憶にありますか。

前田 ……

在間 先程の話では、新潟まで行ったけど帰ってきたということでしょう。

前田 その時とが一致すればそうだと……

在間 出てないのに何故こういう報告書が出るのですか。

前田 ……

前田 ですから私、この時が帰ってきたんであれば、作成したんですが、後で年休にしまして旅費等も戻りました。もしその日が同じであれば。

在間 あなたの記憶では、新潟まで行って急病で帰ってきたのに、旅費を戻したとお

しゃるんですか。

前田 はい。もしその日が同じ日であれば。

在間 公費で出張したんですよ。旅費を返す必要はないですよ。

前田 参加しておりませんので。

在間 プライベートで負担するいわれはないですよ。

前田 実際に参加しておりませんので、年休にして戻入したと思えます。

在間 急病で帰ったのは、個人的な負担ではないということですか。

前田 はい。後々とやかく言われてもいかなので。

在間 二二号証は、五十七年十月一日に書いたものです。この時の報告書ですよ。なぜ急病で帰ったと書かないんですか。

前田 ……

在間 この書類どう見ても、あなたが新潟へ行って会合に出て、こういう感想だと書いてあるんですよ。

前田 ……行く前に書いたんだと。

在間 これまでの証言で、出張などは厳格な扱いをしてきたとおっしゃるから、この事を尋ねざるえんわけです。正直に言って下さい。

前田 おそらく事前に作成しておつたと。

在間 公の会合に行くのに、あらかじめあなたは、会合の感想を書いて出すんですか。

前田 そうとしかとれませんけども。

在間 あなた一日で帰って来たんですよ。市教委に報告したんですよ。

前田 年休にしており、体調こわしてそのま

まおりましたので。

在間 一つの段階で年休扱いにしたんですか。

前田 帰ってきてすぐ。

在間 事前に出来る報告書もどさないかんですよ。

前田 そういうことです。

公務出張でも旅費を戻す

在間 あなたはこういう書類を事前に出すんですか。

前田 行く新幹線の中で書いた事もあります

在間 ほんとに行かれましたか。それをあなた立証できますか。新潟に公務で行ったのに何故旅費を返すんですか。

前田 任務をしておりますから。

審査長 一般論として、公務で出張した時、

ところが病気で会議に出ないで帰ってきた場合は、旅費は本人が負担しなければならぬ

ですか。

前田 私はそういう解釈しております。

審査長 あな自身の解釈でなくて、市教委

の。

前田 そうだと思えます。任務を遂行してい

ないから、返還すべきだと。

在間 そうすると、一般の教員が同じようになっても旅費を返せとおっしゃるわけですね。

前田 私はそうすべきだと思います。

傍聴人 旅先で死んでも公務災害にならないのか。どないするのか。

在間 甲一七号証ないし一九号証。学校日誌

もう一度見てもええですか。決裁印がついて

あります。何時ついたのでか。

前田 これは帰ってからのこと。

在間 これは事実と違う事が書いてある。新潟に出張したことになっている。学校日誌は

そんなものなんですか。正確に書いています

言ったんですよ。

前田 教頭が届けに従って記入していたんだ

と思えます。

在間 最終的にはあなたが内容を確認して決

裁印を押すんですよ。あなたが訂正できるで

しょ。あなたの出張を消して年休にしなきゃ

あいかんですよ。

前田 年休届に切り換えた時点で訂正すべき

であったと思えます。

鈴木 帰って二日目に年休届を出している

したら、教頭が書けるでしょ。年休を。

在間 記載もれとおっしゃるんですか。

前田 ……

参加領収証まで偽造

在間 校長会に参加した参加費はどうしたんですか。

前田 記憶にありません。

在間 主催の学校の参加費の領収書、清算の時に提出しなければあかんでしょ。

前田 そうです。

在間 あなた自分で領収書を作った記憶ありませんか。

前田 そんなもん、記憶にありません。

在間 こちらわかってるんですよ。この主催校の参加費の領収書、市立芦屋高校の公印をさかさまについて、あなた偽造したんじゃないですか。身覚えあるでしょ。

前田 そんなこと記憶にありません。

在間 さかさまについていた公印というのがわかって、その金を全部戻したんじゃないですか。

前田 そういうことはありません。

傍 声が小さい！

在間 この関連の資料の中で、あなたが言ったようなことを根拠づけるようなものは何もない。

前田 年休カードとか戻した事実が、そういうことになるんじゃないですか。

在間 戻したのは、あなた事後的にやった

んですよ。事実が発覚したから。前田 年休カードでもって証明できるんじゃないですか。

深沢 組合員なら次の日に年休カードを出しても不承認にして賃カツにしたんやろ。何やその労務管理は。

在間 甲二二号証のNo.1に欄外十月二十五日のところ0と書いてありますが、事前に払ったお金で過不足なしということですね。

前田 わかりません。

在間 No.2について何も書いていないのはどういう意味かわかりませんか。

前田 わかりません。

在間 清算ができてないんですよ。普通、旅費の精算をして、その時に同時に精算されないとおかしいでしょ。参加費についても一緒にしないとおかしいでしょう。

前田 よく記憶にないんですが。

在間 あなたは、事前に新潟への旅費と参加費を受け取って、精算の段階で現地の校長の主催団体の領収書について印かんが市芦の公印をさかさまについて、ごまかしたのを出しておる。その問題が発覚したので最終的に参加費についての精算ができずに、あなたはお金を戻らせざるをえなかった。

前田 それは……。

傍 はっきり言わんかい。前田 それは……。

おとがめなし

在間 あなたが実際にやったことでない報告書について、市教委で問題にされたことはないんですか。

前田 ……あの……、それは記憶にありませんが。

在間 甲第二二号証が市教委まであげられた状態ですね。これについて、事実はどうでもないという書類の手当はされましたか。

前田 年休カードでもってかえたと。

在間 この書類は撤回されてないでしょう。教育長の印鑑までついてあるじゃないですか。前田 それは……その後教育委員会の方が撤回されていなかったんだと思います。

傍 ナニ！教育委員会の責任か！そんなええかげんか！偽造ばかりしとんか！

在間 最後に一点だけ。甲二二号証の意見・感想まで事前に書いて出すんですか。

前田 あなたは、行ってもいないことについてこんな感想を事前に出すんですか(笑)

前田 校長会はいろいろ種類がありまして、だいたい、ここに感想を書いてあるようなことは……その前年度分のことから想像して書いて……。

傍 そしたら出張に行くな！

在間 しかし、行きましたという報告を、事

前にすること自体も問題だと思っんですが(笑)行って、こんな感想でしたということも事前に出すということですよ。そんな程度の書類なんです。教育長の印かんまで押しますけど。

傍 どが厳格なんや！

在間 このことについて、教育委員会はあなたに対して、何のおとがめもなしですか。

前田 私が年休カードを出して、口頭で言って、事前にこれを出したということについては、おそらく注意をされたと思います。

在間 注意をされたんですか。

傍 なんてそんなこと事前に出したんか。理由をおしえてくれよ。

現場の具体的事情説明もなく減員

在間 「行革大綱」の問題が出てからあととは欠員不補充ということだけではないんだと、それ以上の対策をとりたいたんかというように話であった、ということですか。

前田 「行革大綱」には、「定員の適正化」ということであるので、欠員不補充もふくめて、人員の適正化をはかりたいという気持ちだということでは。

在間 かなり大きな問題なので、あなたの記憶をたどって、具体的に述べてもらいたいです。私が尋ねているのは「行革大綱」に関

連して、市芦にはこういう問題があるから、だから適正化をはかりたいんだという、具体的な説明はあったんですかときいているんです。

前田 その時にはそういう深い話はなかったと思います。

在間 では、その後にあったんですか。

前田 ありました。六一年の一月に説明を受けて、三月……それと九月上旬ですね。

在間 六一年の一月頃に「行革大綱」についての話を一度きいたと、それから六一年の三月から九月にかけて、標準定数法に関連した話をまた聞いたと、こういう話ですか。

前田 おそらく、三月に定数標準法との関連については話があったと……。

在間 三月から九月にかけて、何回ぐらい話があったんですか。

前田 はっきりしているのは、九月上旬に、減員について報告を逐一しなさいということ……。

在間 それは九月上旬でしょう。三月から

九月にかけて何回ぐらい話があったのか。

前田 三月と九月……。だいが前の話なので。

傍 だいが前の話とちがうやないか！

在間 乙九号証の六頁の四項の中で、定数問題に関連する項目というのは、おそらくこの部分だけだと思うんですが、「今後、職員数は事務事業の内容にてらして、見直すべき部

分については見直し、減員または充実はかかり、全体として類似都市の職員数と本市独自の施策に必要な人員を考慮し、適正化をはかる」という部分ですね。

前田 はい。

在間 この「行革大綱」の当否はともかくとして、この一文の中にも「事務事業の内容に照らして、見直すべき部分については見直し」とありますが、あくまでも現場でどのような状況があって、仕事の関連で職員数が妥当かどうかの具体的な判断をするという主旨になるでしょう。

前田 はい。

在間 まず、「行革大綱」の説明をあなたがうけた時、市芦についてはこうこうこういう事情があるから職員の適正化をはかりたい、という具体的な事情の説明はありましたか。

前田 説明をうけた時は、とくにありませんが、一般的な話はしたような記憶はあります……。

在間 定数標準法の話もあるんですが、それはあなたの記憶では六一年の三月頃という話でしたか。

前田 定数標準法についての話ね……。ハイ……ハイ……。

傍 ボケとんか。

在間 大事な問題なので、それは六一年三月のいつ頃ですか思い出して下さい。そんな昔

の話じゃないですよ。
前田 三月の下旬であったと思います。
在間 六一年三月下旬の話で、一クラス減になると、その時に、標準定数法からすると、教員を二名へらさんといかん、だから市芦で二名減にするという話はその段階で市教委から出たんですか。

前田 四名で、二名であればそのままいいんですが、いろいろな点で四で三入るから、もう一名については適切な異動先もないので、そのまま四で三入るとい一名減でいかざるをえないという話。
在間 一クラス減るから二名減らすという話は、その段階で市教委からあったんですか、

年末カンパのお願い

市芦救援会事務局

寒さが身にしみるようになってきましたが、私達の反弾圧闘争は、エネルギーをより強化する時期にきています。

今号報告にありますように、前田和夫市芦前校長のカラ出張という不正は、芦屋市教委の腐敗の有様を見事に映し出しており、追及の手をゆるめるわけにはいきません。毎月一回の定期ビラ配布も、多くの会員・支援者の方々と共に元気に続けられており、徹底して不正をあげき、真実をつき出す情宣活動への多くの共感もよんでいるところですよ。

今後とも、公平委審理闘争と地域でのとりくみを一層強化拡大していく必要があります。

つきましては、毎月一回の審理の準備や、新たな情宣活動のための費用を含めて、会費による運営の他にカンパ要請が必要となっております。

今後の救援会活動をより充実させていくためにも、年末カンパをよろしくお願い申し上げます。同封の振替用紙をご利用下さい。あわせて会費納入と新規会員拡大につきましてもよろしくお願ひ申し上げます。

最後に、次回審理は十二月二六日(月)午前十時〜十二時と、年末のご多忙の頃とは思いますが、証人の不正を追及していくべく、是非とも多数の方々の傍聴参加をお願いいたします。

「毎日新聞」1988.11.17

なかったんですか。
前田 それは……。
在間 市教委としたら、市芦で二名減員したい、という話はあったんですか、なかったんですか。
前田 それはあったと思います。

進学保障問題で芦屋市を批判

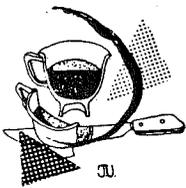
市芦高で同対審副会長
芦屋市同和对審議会の元
木健副会長(大阪大教授)は
十六日、市同和行政につい

ての答申後記者会見し、市立芦屋高校の進学保障問題について「審議会としての意見だが、(進学保障という)市と地元との約束がある以上、それを尊重して欲しい。この二年間、定員割れにもかかわらず、不合格者が出たのは遺憾だ」と述べ、市芦高をめぐる市の教育行政を批判した。

市芦高は四十六年、家庭環境や経済的理由から高校進学を断念せざるを得ない生徒を特別枠で入学させる「進学保障措置」をスタートさせ、四十九年からはその枠内で障害者も受け入れていた。ところが、市教委は、この数年退学者が多く、市民が不信を募らせているとして、昨年、今年の入試で定員割れにもかかわらず、大量の不合格者を出した。

特集・市芦文化祭

近づく文化祭



市芦障害研顧問団

於 芦屋ルナ・ホール

うたえないので、どうしようかなとおもっている。ぼくはおりょうかなとおもっている。ぼくはたのしいげきをやりたい。 Kくん
「わかりませんでした。どうしたらよいのでしょうか」 Tくん

市芦に、地元中学を卒業した知恵遅れの障害をもつ生徒が入学し始めて、十四年になる。学校に、クラスに、障害生がいることが「こうでもない、心はどこかで時日常」となるだけの時間が経過している。そのような「日常」の流れをとめ、市芦に在籍する障害生が、あらためて全校生徒に向い会うのが、毎年秋に行なわれる文化祭である。

今年もまた、文化祭が近づいてきた。てらうことなく自分の役を演じきる障害生、長い台詞をよどみなくしゃべる障害生、彼らのひたむきな姿を、市芦の多くの生徒が温かくつみこんでくれる。

夏休みが終り、二学期が始まると、長丁場を迎えた教師のさえない顔をしり目に、障害研の生徒たちは生き生きとしてくる。

「わたしはやりたいです。わたしはげきがやりたいです。うたをうたいたいです。おどりをやりたいです。はなしをやりたいです。ことしては、はなしをやりたいです」 Iさん

翌日の昼休み、障害研全員が部屋に集り、部長Mくんから三年生としては、今年も文化祭で劇がやりたいという提案がされ、二年、一年生も異議なしという事で公演することが決定した。

練習のなかで

円陣をくみ「今から障害研の劇の練習を始めます」という部長Mくんの合図で、それぞれが持場につき練習が始まる。土方の父を演

じる部長のMくんは乗りに乗っている。お人好しで酒乱ぎみの父親役を「ビシッ」ときめてくれ、練習の始めのあいさつと終りの反省会で毎日の練習のめりはりをだしてくれている。

今年の劇の題名は「明夫とみさ子」、そのみさ子役を演じるのはIさん。小さい時から施設での生活が続いており、叱られたり注意されることへの反発が強い。そんな彼女が練習が始まってからは、ブンブンすることがへってきた。

劇の終りに作文を読みあげるが、「わたしは、ずっとひとりでした。お母さんいてほしいです」の段になると涙がこぼれおち、部員や教師をしんみりとさせてくれる。

明夫を演じるのはTくん。「どうしたらよいのでしょうか」と素気ない文章を書きながら、真剣にとりくんでくれる。歌が大好きなのだが、小声でしかうたえない。劇の最後にうたう「贈る言葉」もいつもの小声のワンパターン。ところが練習も後半になったある日から、腹の底から大声でうたいはじめた。三年間のつきあいで聞く始

めての大きな声。Tくんの中で何が起りはじめている。
時計さんはKくん。自意識が強く、人の前では大きな声でだしきれず、練習中に再三注意をうける。注意をうけると、怒ったり泣いたりし、「くそ！こんな劇やめたるわい」とくり返すKくんだが、家に帰って特訓し、次の日の朝、「先生、きのう家で練習してきたぞ」とやる気をみせてくれる。

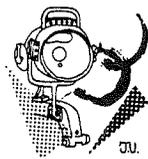
先生役のNくん(二年生)、ナレーター役のYくん(一年生)。二人とも聴力の障害をもっている。二人とも脇をかためる役だが、がんばってくれている。台詞の少ないNくんは、他の生徒の動きに目を配り、いろいろアドバイスをしてくれる。舞台にたってしゃべるのが始まるYくん。サッカー部の練習の合間をぬって参加してくれている。

母親役はY・Hくん(二年生)。自閉的な傾向をもっている。台詞の暗記は他の誰よりも確かなのだが、感情をこめた役を演じることが難しい。そのことを教師以上に心配したのはY・Hくんの家族である。「お兄ちゃんのセリフ、私がテープにいれるから、それを聞

いて練習したら」という妹の気遣いを「結構です」と断わってしまったY・Hくん。ところが、悲しい場面では泣き、脚本の台詞で不足しているところは自分でつけたし、そんな指導をしてこなかった教師をビックリさせた。「自閉症」とよばれてきたY・Hくんが、劇の練習を通じて自閉の殻を破っていく姿は感動的である。

明日はいよいよ文化祭の本番である。一ヶ月間の練習の成果が、

市芦の片隅で



鈴木 紀之

本部教研の報告書の検討作業があるから「山へ上った」(強配された者は、山から降りて、山にある学校を望み見ているので)時のことである。

秋冷の澄んだ空気をゆすって、少し不揃いの歌が障害研の部室から聞えてきた。文化祭公演のための障害研の劇の練習風景だった。作業を後回しにしてのぞいてみ

わずか二十分という短い時間で試される。台詞を忘れないだろうか、台詞をとばさないだろうか、大きな声でしゃべれるだろうか、体調を崩して休まないだろうか、心配だらけである。

(十一月十日記)

る。ちょうど通しでもう一度さらうというところだった。

吉村さんの細やかな演出は相変わらずで、開幕のベルの音も本格的なら、幕の上げ下しのジェスチャーから電氣をつけたり消したりの照明まで、その気にさせていた。

新品の地下足袋のホックをはめるのに案外手慣れたところを見せたモリワキは、得意の落合ら中目

ので、お母さん役を二年の男の子がやっていた。カツラをかぶり、着物の襟をあわせすっかりその気であった。多いセリフをこなし、父親役であるモリワキとの呼吸もよかった。息子であるトマツの高校進学をめぐっての彼女(?)の心配も「オレにまかしとけ、どんなことでも高校へ行かしたる」というモリワキのセリフで決っていた。先生役をしていた二年のもうひとりの男の子も動じない演技だった。

「ミュージックまでのオンパレードで飽きさせない。例の生真面目な顔で神谷さんがテープを回していた。前に来た時も、音楽の西占さんに最後の合唱のことでしきりに相談していた。「どうしたら合唱になるか、これら個性豊かな、それぞれの子の持ち味を殺さずに」ミサちゃんが一人で「高校を出てからのこと」を朗読した。しっかりとした作文だった。くりくりした目で、ニコニコして重い作文をしっかりと読んでいた。まわりを皆が囲み、皆の気持を代表していた。

練習が終ると、円くなり、モリワキが「今から反省会をします」と言い「スズキくん、どうでしたか」と聞いてきた。あてられて、何となく胸がつまって「よかった。よかった」と繰り返していた。練習中、部室の隅のコンロで焼きそばをつくっていた深沢さん(ヤキソバのいいにおいの中で、彼らは練習に熱中していたのだ!)が注文をつけ、最後をモリワキが「今日日はちゃんとできた。よかったといわれたことがよかった。月曜日からはあと三日やからしっかり練習します」としめくくった。

一人ひとりの出番をつくり、舞台を全員のものにしていくといういつもながらの脚本だし演出だった。「ああやっぱり学校はええなあ」市教委本丸の事務局にいる深沢さんの嘆声であった。それにしてても放課後の練習風景がなぜこんなにも感動的だったのだろうか。障害研の生徒と先生の日常のやりとりが、そのままにじみでていた。一年の時、ルナホールで「マイオールドケンタッキーホーム」を力いっぱい歌ったカワイくんの歌がもう一度聞きたい。

シナリオ 明夫とみさ子

市芦障害者解放研究会

キャスト

みさ子 — M・I 明夫 — K・T
時計 — K・K 先生 — M・K
父 — K・M 母 — H・Y
ナレーター — T・Y
子供たち — 三年生女子有志

スタッフ

演出 — K・M 照明 — M・I
音響 — K・K 道具 — F・N
(下手より、父親登場。開幕の太鼓を力強く打ち鳴らし、下手へ退場。)

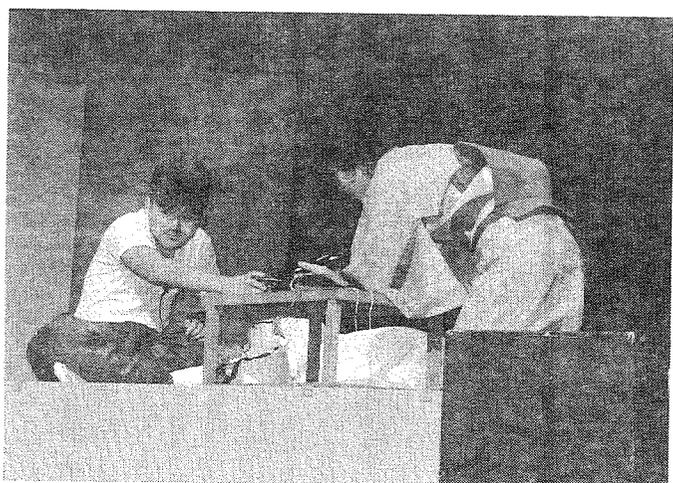
(下手よりナレーター登場)
ナレーター 今日秋祭りの日です。祭りが大好きな明夫は、お母さんになんいよで、遊びにでかけました。高校三年生のみさ子と出会って、いっしょに遊んでもらいました。
(下手へ退場)

(母、針仕事をしている。時計(七時半)の方を見て)
母 「明夫、おそいわねえ。どこにいったのかしら……。まさか遠くに行つて、帰れなくなつたのじゃないだろうか……。それにしてもおそいわ。大丈夫かしら。」
(明夫、イスにすわり、みさ子、子供たち

…？ そうだわ、今夜、お父さんに相談してみよう」
 (あがって針仕事をつづける)
 (父親登場。かたに道具をかつぎ、歌「中日ドラゴンズ」、野球のジエスチャー、声を出しながら)
 父 「おい、ねえちゃん、こんな時間に、なにしてるのや」
 みさ子 「うるさいわね。ほっといてよ」
 父 「こわいねえちゃんやな。おそいからはよ帰りよ」
 (玄関の戸をあけ、入り、しめてから)
 父 「おい、帰ったぞ」
 (くつをぬいであがり、テーブルにすわる)
 (母、針仕事をやめる)
 母 「お帰りなさい。毎晩おそいわね。ごくろうさん」
 父 「母ちゃん、酒もってきてくれや」
 (母、コップをとりに行き、テーブルの前にすわる)
 母 「酒ばかりのんで。体に毒よ。あんたは、この家の大黒柱なんだから」
 父 「ごちゃごちゃいわんと、はよついでくれや」
 (母、酒をつぎ、父のむ。5回くりかえす)
 父 「母ちゃん、もう一本や」
 父 (大きくもう1回) 「母ちゃん、もう一本や」

時計さん 「子どもはかえる時間だよ。家で母さん、まってるぞ」
 (時計のうしろにかくれる)
 みさ子 「どこからきたの」
 (明夫、たちあがって)
 明夫 「芦屋からきたよ」
 みさ子 「とおくからきたのね。八時よ。おそいから、おうちにかえり。おうちの人がしんばいしているわ」
 明夫 「うん。おねえちゃん、ありがと。またあそんでね。バイバイ」
 (戸のところをかくれる)
 子供たち、みさ子(明夫へ手をふって)「バイバイ」(イスにすわる)
 暗転
 ナレーター みさ子は、障害をもった子どもたちが生活している施設から、高校にかよっています。放課後、卒業後の進路の作文をかいていて、おそくなり、おまけに、道草をしたのです。
 みさ子 「八時や。どうしよう。学園のみんなしんばいしているやろな」
 (カバンから作文を出してよむ)
 (戸をあけて、はいり、戸をしめる)
 明夫 「ただいま」
 (くつをぬいで、テーブルの前にすわる)
 (母、針仕事の手をやすめ)
 (母、おこって立ちあがり、大きな声で)
 母 「あんた、なにいつてるの、もうだめよ」
 (父も立ちあがり、母のむなぐらをつかみ、こわい声で)
 父 「なんやと、わしに口ごたえするのか」
 (父、母もみあう。明夫ふとんからおきて)
 明夫 「お父さん、お母さん、けんかしたらあかん」
 (三人、テーブルをかこんですわる)
 母 「あんた、いいかげんにしてよ。ふだんはいい人なんやけど……。酒のんだらむちゃくちゃするんやから。自分のこと、家族のこと、大切にしてほしいのよ」
 (少し間をおく)
 母 「今日、そうだしようと思っていたのだけど……。明夫、あと半年で中学校を卒業するのよ。中学を卒業したあとの明夫のこと、考えたことあるの……。どうしたらいいの！」
 (しばらく泣く)
 (父、たちあがり、うでぐみをして)
 父 「あのなあ、母ちゃん。わしは、明夫を高校に行かせたろと思ってるのや……。高校にはいったら、お金たくさんいるやろし、そやから、毎日残業してがんばってるんや。高校に入学できたら、わし、もっともっと働いてやる。心配せんでもええよ、母ちゃん」
 (父すわる)

母 「おかえり、おそかったねえ。夜あそびしたらだめよ。おそくなるときは、家に電話かけるように言ってるでしよう。電話番号わすれたの？うちの電話、なん番やった」
 明夫 「三十一―一八九二」
 母 「知ってるやないの。これから、おそくなるときは、電話しなさいよ」
 (自分のかたをトントンたたき)
 母 「ああ、かたがこった。明夫、悪いけど、母さんのかたをもんどくれ。」
 母 「もう10回もんどくれ」
 母 「もう10回もんどくれ」
 (明夫、母のかたを30回たたき)
 母 「ありがと。明夫じゃうずやねえ。あしたも学校やろう。早くねなさい」
 (針仕事をつづける)
 明夫 「うん」
 (母さんがふとんをひいてやる)
 (明夫、ふとんにはいる)
 明夫 「お母さん、おやすみなさい」
 母 「おやすみ」
 (針仕事をやめて土間におり、玄関をあけて外に出る、えんにすわる)
 母 「お父ちゃん、今日もおそいわねえ。毎日、残業、残業で体をこわさなければいいのだけ……。それはそうと、あと半年で明夫が中学を卒業するのだから。明夫は、高校へ行きたいといってるけど、大丈夫かしら……」
 母 「あんた」
 (母、父の手をにぎる)
 (時計の針を十時に進め、カネを10回たたく)
 時計さん 「みんなが心配しているよ」
 暗転
 (下手よりナレーター登場)
 ナレーター みさ子の帰りがおそいので、学園では、みんながたいへん心配していました。心配のあまり、学園の先生がさがしにきました。
 (先生、上手より登場)
 先生 「みさ子。みさ子」
 (明夫の家の戸をたたいてはいる)
 先生 「こんばんは。この近くで高校生の女の子をみかけませんでしたか」
 明夫 「その子、知っているよ。ぼくがつれていってあげる」
 (明夫、先生の手をひっぱって、みさ子のところへつれていく。父、母もいっしょについていく。みんなみさ子をかこむ)
 先生 「みさ子、何してたん。学園のみんなが心配しているぞ」
 (みさ子、イスから立ちあがり)
 みさ子 「先生、ごめんなさい。作文をよんでいたの」
 (作文を先生にみせる)
 先生 「先生に、読んでくれるか」



イスを囲んでたちあがる)
 みさ子、明夫、子供たち 「かごめ、かごめ、かごの中の鳥は……。うしろの正面だあれ」
 明夫 「八ちゃん」
 みんな 「ちがったよ」(3回くりかえす)
 (かごめ、2回目の途中で針を八時に、時計のうしろから出てきて、時計の針を八時にすすめ、カネを八回たたく)
 (子供たち、遊びをやめる)

時計さん 「子どもはかえる時間だよ。家で母さん、まってるぞ」
 (時計のうしろにかくれる)
 みさ子 「どこからきたの」
 (明夫、たちあがって)
 明夫 「芦屋からきたよ」
 みさ子 「とおくからきたのね。八時よ。おそいから、おうちにかえり。おうちの人がしんばいしているわ」
 明夫 「うん。おねえちゃん、ありがと。またあそんでね。バイバイ」
 (戸のところをかくれる)
 子供たち、みさ子(明夫へ手をふって)「バイバイ」(イスにすわる)
 暗転
 ナレーター みさ子は、障害をもった子どもたちが生活している施設から、高校にかよっています。放課後、卒業後の進路の作文をかいていて、おそくなり、おまけに、道草をしたのです。
 みさ子 「八時や。どうしよう。学園のみんなしんばいしているやろな」
 (カバンから作文を出してよむ)
 (戸をあけて、はいり、戸をしめる)
 明夫 「ただいま」
 (くつをぬいで、テーブルの前にすわる)
 (母、針仕事の手をやすめ)
 (母、おこって立ちあがり、大きな声で)
 母 「あんた、なにいつてるの、もうだめよ」
 (父も立ちあがり、母のむなぐらをつかみ、こわい声で)
 父 「なんやと、わしに口ごたえするのか」
 (父、母もみあう。明夫ふとんからおきて)
 明夫 「お父さん、お母さん、けんかしたらあかん」
 (三人、テーブルをかこんですわる)
 母 「あんた、いいかげんにしてよ。ふだんはいい人なんやけど……。酒のんだらむちゃくちゃするんやから。自分のこと、家族のこと、大切にしてほしいのよ」
 (少し間をおく)
 母 「今日、そうだしようと思っていたのだけど……。明夫、あと半年で中学校を卒業するのよ。中学を卒業したあとの明夫のこと、考えたことあるの……。どうしたらいいの！」
 (しばらく泣く)
 (父、たちあがり、うでぐみをして)
 父 「あのなあ、母ちゃん。わしは、明夫を高校に行かせたろと思ってるのや……。高校にはいったら、お金たくさんいるやろし、そやから、毎日残業してがんばってるんや。高校に入学できたら、わし、もっともっと働いてやる。心配せんでもええよ、母ちゃん」
 (父すわる)

(父、みさちゃんに近づき) 父 「おっちゃんも、ききたいな」

みさ子 「うん、いいよ」

(前にでて、スタンド・マイクに向かって読む)

(ナレーター、時計さんもみんなと並ぶ)

みさ子 「わたしは Mです。S学園から市芦に来ています。お父さんと はなれてす

んです。

わたしは むかしの こと おぼえてませ

ん。気がついたときは 大阪のしせつでした。

わたしは ずっとひとりでした。お母さん

いてほしいです。おとうさんに ずっとい

ほしいです。

わたしは みんながすきです。市芦のみんな

ながすきです。

わたしは せがひくいで こどもがい

じめる。気にいらんと すぐ おこってしま

う。

むずかしい けえさん でけん。かんじ

すこし こまります。

わたしは 学校で 何回も ないた。

わたしは そうじ きちんとできます。

わたしは ちいさい子の せわできます。

わたしは もうしんぼうする。

わたしは はたらきたい。

わたしは そつぎょうして仕事したい。

仕事してお父さんといっしょにくらすんや。

それまでしんぼうする。わたしはみんなと

おなじじことしたい。

みんなといっしょに しんろを みつけた

い。

三年一組 M・I

(父、みさちゃんに近づき)

父 「みさちゃん、がんばれよ」

(時計さん、みさちゃんに近づき)

時計さん 「みさちゃん、がんばれ」

明夫 「おねえちゃん、がんばってね。みんな

で歌、うたおう」

(子供たち集合)

(みさ子、みんなのところへさがる)

全員 「くれなずむ町の…… あいする

あなたへおくることば」

——幕——

国労北九州支部より

オルグ来阪

救済会会員 T

十月一八日、国労北九州支部門
司分会からオルグに来られました。
国労というだけでJRへの採用
を拒否され、四六〇〇名が清算事
業団に入れられている。「自学自
習」と称し、仕事を与えられてい
ない実態。JR九州の「再就職の

幹旋はしない」という方針に対し
抗議した組合員には暴力事件をデ
ッチ上げ、停職処分(四ヶ月二名、
一ヶ月が三名)という生々しい現
場の実態をお聞きしました。
分会からも市芦弾圧の報告を行
ない、共に連帯して闘かおうとい
う確認が行なわれました。又、同
夜上宮川文化センターで行なわれ
た国労と連帯をすすめる「阪神地
域の会」では、強配されている教
師との交流会も持たれ、国労組合
員にカンパと撤布が送られました。

活動日誌(抜粋) 1988.10.16~11.5

- 10・18 九州清算事業団・国労北九州支部から市芦分会にオルグ。夕方駅ビラ。ガンバレ国労・阪神地域の会結成集会。
- 24 麦の家オープンまつり実行委に参加。
- 27 拡大事務局会議
- 28 総評・地県評・地区労運動の継承・発展・強化をめざす全国集會に参加。
- 29 通信No.22発送。法対会議。
- 11・2・3 麦の家合宿に参加。
- 3 みんなでつくろう団結まつりに参加。
- 5 法対会議
- 6 兵高教組本部教研に参加
- 8 第十三回公開口頭審理
- 9 教育を考える市民の会に参加
- 11 早朝本庁前ビラ。夕方駅ビラ
- 14 市芦文化祭で障害研劇公演
- 15 市芦にて、大阪桃谷高校(通信)と障害児教育の実践交流。事務局会議